

3. 爬虫類

(1) 調査概要

1) 調査方法

1991年に「熊本県希少野生動植物検討委員会」の設置以降5年をかけて、県内全域の6地域の生息状況を調査した。この調査結果にその後の補足調査の結果も加えて、RDB1998の原稿作成の資料にした。この際は現地での確認調査を基本にしたが、文献調査、標本調査も行った。さらに、県内全地域で188校の小・中学校の教師・児童生徒・保護者などを対象にしたアンケート調査も行い、これも参考にした。過去のRL2004 およびRL2014の補足調査、RDB1998、RDB2009の調査結果のモニタリングとRDB2019作成のための補足調査を実施した。

2) 産地情報の採用基準

現地での生息確認調査を基本にした。アンケート調査で得た情報については、信憑性の高いものは採用した。また、信頼性の高い文献などの情報も採用した。なお、生息確認は、路上死体を含む成体・幼体の目撃によって行い、ヘビ類では種の同定が可能な脱皮殻も確認記録に含めた。

3) 調査結果の概要

県内の爬虫類は2目7科16種(亜種)である。それらのうち、カメ類の1種とヘビ類の2種を準絶滅危惧(NT)として選定した。

① ニホンイシガメ

生息確認情報は急速に減少していて、カメ類の中では最も絶滅が危惧されている。個体数の減少は、河川等の護岸工事による産卵場所の減少、外来種の侵入、水質汚濁などが影響していると考えられる。近年、クサガメとニホンイシガメの交雑種(ウンキュウ)が県内でも確認されるようになったので拡大が危惧される。

② タカチホヘビ

森林の落葉が堆積した湿気のある所で半地中性の生活をしている。落葉や朽木を除去している時に偶然に確認される。局地的に生息しているため、森林の伐採、林道工事などによる生活環境の悪化で、生息地・生息個体数ともに減少していると思われる。

③ シロマダラ

小型のヘビ類やトカゲ類を主に採餌する。民家近くで確認され、植木が多い旧家の植木鉢の下や倉庫の中で捕獲されることが多い。夜行性のために目撃される事は少ない。近年、住宅の近代化などで、生息地・個体数ともに減少している。

4) 今後の課題

ニホンイシガメとクサガメは県内に広く分布するが、ミシシippアカミガメとの競合が大きく、今後の生存競争が心配される。ニホンスッポンも県内に広く生息するが、養殖個体の逃げ出しもあり、全てが自然な状態での生息とは言い難い状況である。カメ類は寿命が長く、同一個体が数例の目撃にされることがあり、捕獲個体に標識をつけるなどの方策も検討する必要がある。

ヘビ類の生息地は食性などの生態と密接に関係している。特に準絶滅危惧(NT)に選定されている種は狭食性、夜行性、半地中性で生息確認が困難である。ジムグリ、ヤマカガ

シなども人の生活圏内では殆ど見なくなった。ジムグリは半地中生活のため、土地造成などの影響を受けている。ヤマカガシは主にカエルを採餌するので、カエルの減少にともない個体数が減少している。準絶滅危惧(N T)のニホンイシガメ・タカチホヘビ・シロマダラとともに、県内に生息する爬虫類全種の確認調査の必要性を感じる。

(2) 種の解説

準絶滅危惧(N T)のカテゴリーに位置づけた 3 種について、以下に解説する。

準絶滅危惧 (NT)

ニホンイシガメ

Mauremys japonica (Temminck et Schlegel, 1835)

イシガメ科

熊本県カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)
環境省カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)

選定理由 近年減少

生息環境 河川の中流、低地の池沼や水田地帯に、クサガメ、ニホンスッポンと同所的に生息

生息状況 県内に広く分布していたが、河川や池沼の改修（特に水路の三方張り）が行われた後は多くの地点で見られなくなった。またミシシippアカミミガメの侵入繁殖している場所でも確認例が少なくなり、生息地・個体数ともに減少している。

生存への脅威 池沼の改修、河川改修、水質汚濁、外来種の侵入

特記事項



撮影：石黒義也

タカチホヘビ

Achalinus spinalis Peters, 1869

タカチホヘビ科

熊本県カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)
環境省カテゴリー

選定理由 近年減少

生息環境 山地の溪流近くの広葉樹林帯に生息し、夜行性で昼間は倒木や石の下、法面の下方落ち葉の堆積した下などに隠れている

生息状況 県内各地の生息確認の記録はあるがごく少数。森林伐採、山地の河川の改変、造林による乾燥化などの環境の変化により確認数がさらに減少している。

生存への脅威 森林伐採、人工造林、道路工事

特記事項



撮影：石黒義也

シロマダラ

Dinodon orientale (Hilgendorf, 1880)

ナミヘビ科

熊本県カテゴリー
準絶滅危惧 (NT)
環境省カテゴリー

選定理由 近年減少

生息環境 平地、里山の森林の朽木や岩の下その他、木材集積場、旧家の納屋、庭の植木鉢の下などで確認される

生息状況 県内各地の生息確認の記録はある。市街地周辺では見られなくなった地点が増加している。個体数が少ない上に、夜行性のため目撃されることが少ない。

生存への脅威 森林伐採、土地造成、農地開発

特記事項 里山の林道で雨後の水たまりで目撃されることもある。



撮影：石黒靖之

(3) 文献

1. 朝比奈正二郎・上野俊一 (1992) レッドデータマニアルズ. 宝島社.
2. 五家荘の会「泉村の自然」編集委員会 (1993) 泉村の自然. 泉村役場.
3. 入江照雄 (1982) 菊池溪谷の動物. 熊本洞穴研究会.
4. 石黒義也 (1998) 白髪岳自然環境保全地域の両生類・爬虫類. 白髪岳自然環境保全地域調査報告書. 環境庁自然保護局.
5. 環境庁自然保護局野生生物課 (1991) 日本の絶滅の恐れのある野生生物. 日本野生生物研究センター.
6. 環境庁 (1993) 日本産野生生物目録 脊椎動物編. 自然環境研究センター.
7. 環境庁自然保護局野生生物課 (2000) 日本の絶滅の恐れのある野生生物. 日本野生生物研究センター.
8. 環境省自然保護局野生生物課 (2014) 日本の絶滅の恐れのある野生生物. 株式会社ぎょうせい.
9. 木場一夫 (1962) 奄美群島およびトカラ群島産ハブ属に関する研究. 日本学術振興会.
10. 熊本県希少野生動植物検討委員会 (1992) 九州中央山地における希少野生動植物の実情と保護方策. 熊本県環境保全課.
11. 熊本県希少野生動植物検討委員会 (1993) 人吉球磨地域における希少野生動植物の実情と保護方策. 熊本県環境保全課.
12. 熊本県希少野生動植物検討委員会 (1994a) 天草地域における希少野生動植物の実情と保護方策. 熊本県環境保全課.
13. 熊本県希少野生動植物検討委員会 (1994b) 芦北水俣地域における希少野生動植物の実情と保護方策. 熊本県環境保全課.
14. 熊本県希少野生動植物検討委員会 (1995) 阿蘇・県北地域における希少野生動植物の実情と保護方策. 熊本県環境保全課.
15. 熊本県希少野生動植物検討委員会 (1996) 県央地域における希少野生動植物の実情と保護方策. 熊本県環境保全課.
16. 熊本開発研究センター (1996) 動物をめぐる江津湖の自然環境の変化 (爬虫類・両生類) など. 江津湖環境調査報告書. (財) 熊本開発研究センター.
17. 熊本開発研究センター (1996) 江津湖の動物の生態 (爬虫類・両生類) など. 江津湖環境調査報告書. (財) 熊本開発研究センター.
18. 熊本生物研究所 (1991) くまもとの自然シリーズ3 阿蘇・菊池溪谷の自然.
19. 大島正満 (1944) 大東亜共栄圏 毒蛇・解説. 北隆館.
20. 関慎太郎 (2016) 野外観察のための日本産爬虫類図鑑.
21. 千石正一・疋田努・松井正文・仲谷一宏 (1996) 日本動物大百科5. 両生類・爬虫類・軟骨魚類. 平凡社.
22. 清水大典 (1941) 高千穂蛇の産地. 採集と飼育3 (10). (財) 日本科学協会.
23. 自然環境研究センター (編) (2001) 生物多様性調査動物分布調査 (両生類・爬虫類) 報告書. 生物多様性センター.
24. 高良鉄夫 (1962) 琉球列島における陸棲蛇類の研究. 琉球大学農家政工学部学術報告第9号.
25. 田中顕一・村上貞昭 (1982) 菊池溪谷の爬虫・両生類. 菊池溪谷の動物. 熊本洞穴研究会.
26. 田中孝治・森哲 (2000) 日本産蛇類の捕食者に関する文献調査. 爬虫両生類学会報2000 (2).
27. 内田清之助 (1957) 原色動物大図鑑. 北隆館.
28. 内田亨 (1968) 原色現代科学大事典5—動物II. 学習研究社.
29. 内山りゅう・前田憲男・沼田研児・関慎太郎 (2002) 決定版日本の両生爬虫類. 平凡社.